マテンゴ語における「母音挿入」

米　田　信　子

"Vowel Insertion" in the Matengo Language

Nobuko Yoneda

抄　　録

マテンゴ語では、形態素の結合の際にその境界に母音が挿入されることがある。これは文法的にも意味的にも影響を与えるものではないが、単に音声的条件によって起こっているわけでもない。本稿では、この現象の現われ方を検討し、「母音挿入」が引き起こされる環境と条件について考察する。

キーワード：マテンゴ語、「母音挿入」、名詞クラス接頭辞、目的語辞

(2002年9月12日　受理)

Abstract

In Matengo, a vowel is sometimes inserted between morphemes when they are combined. This vowel doesn't affect either the grammar or the sematics. At the same time, it's not simply a phonetic phenomenon. This paper will discuss the environment and the condition in which the "vowel insertion" happens.

Key words: the Matengo language, "vowel insertion", noun class prefix, object-marker

(Received September 12, 2002)

1．はじめに

1.1　本稿の目的

マテンゴ語はアフリカ大陸赤道以南に広く分布しているバンツー諸語のひとつで、タンザニア西南端、マラウィ湖東岸に位置するンビンガ県で話されている[1]。他のバンツー諸語と同様にマテンゴ語は極めて膠着性の高い言語であり、いくつもの形態素が結合して語が形成される。その結合の際、形態素の境界に母音が挿入されることがある。この母音の挿入は、文法的にも意味的にも影響を及ぼすものではない。この現象を「母音挿入」と呼ぶことにする。本稿では、母音挿入が起こる環境と条件について考察し、さらに母音挿入との区別が明確でない別の現象との違いを明らかにすることを試みる。なお本稿で用いるマテンゴ語のデータは、すべて筆者が現地調査によって収集したものである[2]。

1.2　基本的な音韻・文法事項

本論に入る前に、マテンゴ語の音韻・文法事項のうち本稿に関係していることがらについて簡単に示す。マテンゴ語文法の詳細は米田（2000）を参照されたい。

1.2.1　マテンゴ語の母音と子音

マテンゴ語の母音は、i、e、ɛ、a、u、o、ɔの７音で、それぞれに長短の対立がある。

母音：　/ i, e, ɛ, a, ɔ, o, u /
　　：　/ i:, e:, ɛ:, a:, ɔ:, o:, u: /

子音は以下のとおりである。

		両唇音	歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
閉鎖音	(vl)	p	t		k	
	(vd)	b			g	
摩擦音	(vl)		s			h
破擦音	(vd)			dʒ		
側面接近音			l			
鼻音		m	n	ɲ	ŋ	
半母音		w		j		

体系的には、側面接近音 / l / と有声破擦音 / dʒ / が、それぞれ / t / 、 / s / に対立する有声音であると考えられる。これらは鼻音に先行される環境では、それぞれ異音 [d]、[dz] で現われる。従って [ndz]、 [nd] は音韻論的には / ndʒ / 、 / nl / であるが、本稿ではこれらをそれぞれ ndz、nd と表記する[3]。

形態素の結合によって母音が連続する場合、それが同じ母音の連続であれば、ひとつに融合される。異なる母音が連続する場合は以下のような縮約が起こる。

①前方の母音がu、iの場合

u、iは半母音化して、それぞれw、jで現われる。

u + i → wi	mu- + ihi	→	mwihi	「けちな人 sg.(1)[4]」
u + ɛ → wɛ	lu- + ɛmbɛ	→	lwɛmbɛ	「かみそり sg.(11)」
u + a → wa	mu- + ana	→	mwana	「子供 sg.(1)」
u + ɔ → wɔ	gu- + ɔha	→	gwɔha	「それ全体 (3)」
i + u → ju	li- + uŋgula	→	ljuŋgula	「小カエル sg.(5)」
i + ɛ → jɛ	hi- + ɛmbɛmbi	→	hjɛmbɛmbi	「みぞおち pl.(8)」
i + a → ja	li- + akapoŋgu	→	ljakapoŋgu	「はば鷹 sg.(5)」
i + ɔ → jɔ	mi- + ɔdʒɔ	→	mjɔdʒɔ	「胸 pl.(4)」

ただしiの直前の子音がs、dʒ[5]の場合には半母音化は起こらず、後ろの母音に融合される。

si + V → sV	si- + obi	→	sobi	「爪 sg.(7)」
	cf) hi- + obi	→	hjobi	「爪 pl.(8)」
	si- + ɛpu	→	sɛpu	「ふるい sg.(7)」
	cf) hi- + ɛpu	→	hjɛpu	「ふるい pl.(8)」
dʒi + V→dʒV	dʒi- + omɛ	→	dʒomɛ	「大切な～ (9)」
	cf) li- + omɛ	→	ljomɛ	「大切な～ (11)」
	dʒi- + aŋgu	→	dʒaŋgu	「私の物 sg.(9)」
	cf) li- + aŋgu	→	ljaŋgu	「私の物 sg.(11)」

②前方の母音がaの場合

前の母音は後ろの母音に融合される。

a + i → i	ma- + ihu	→	mihu	「目 pl.(6)」
a + u → u	ma- + uŋgula	→	muŋgula	「小カエル pl.(6)」
a + ɛ → ɛ	ba- + ɛnɛ	→	bɛnɛ	「持ち主 pl.(2)」
a + ɔ → ɔ	ba- + ɔha	→	bɔha	「彼らみんな (2)」

1.2.2 基本的な文法事項

バンツー諸語は名詞クラスとその文法呼応システムで知られているが、マテンゴ語にも名詞クラスがある[6]。名詞クラスとは、言わば文法性（gender）のようなもので、すべての名詞がいずれかのクラスに属している。それぞれのクラスには独自の名詞クラス接頭辞があり、それによって、その名詞が属しているクラスが示される。名詞の構造は「名詞クラス接頭辞－名詞語幹」である。例えば、「蜂」を意味する名詞 ludʒusi は11クラスに属しており、11クラスの名詞クラス接頭辞 lu-と名詞語幹 dʒusi という２つの形態素で構成されている。各クラスの名詞クラス接頭辞と呼応接辞は表１に示すとおりである。

表１．各クラスのクラス接頭辞と呼応する主語辞・目的語辞・属辞

名詞クラス		名詞クラス接頭辞（NC）		主語辞	目的語辞	属辞
		①	②	(S)	(O)	
1	1 sg.	—	—	n-	-n-	dʒwa
	2 sg.	—	—	gu-	-gu-	
	3 sg.	mu-	N-	dʒu-	-mu-	
2	1 pl.	—	—	tu-	-tu-	ba
	2 pl.	—	—	mu-	-mu-	
	3 pl.	ba-	aka-/a-	ba/a-	-a-	
3		mu-	N-	gu-	-gu-	gwa
4		mi-		dʒi-	-dʒi-	dʒa
5		li-		li-	-li-	lja
6		ma-		ga-	-ga-	ga
7		si-	ki-	ki-	-ki-	sa
8		hi-	i-	i-	-i-	hja
9		ϕ-		dʒi-	-dʒi-	dʒa
10		ϕ-		i-	-i-	hja
11		lu-		lu-	-lu-	lwa
12		ka-		ka-	-ka-	ka
13		tu-		tu-	-tu-	twa
14		u-		gu-	-gu-	gwa
15		ku-		ku-	-ku-	kwa
16		pa-		pa-	-pa-	pa
17		ku-		ku-	-ku-	
18		mu-		mu-	-mu-	
20		gu-		gu-	-gu-	gwa

①と②の区別がある場合には、①が基底形、②はその異形態である。②の異形態は、子音で始まる２音節以上の名詞語幹に付く場合に現われる。①の形で現われるのはそれ以外の場合、すなわち母音で始まる名詞語幹あるいは１音節の名詞語幹に付く場合である。接頭辞 N-（１、３クラス）は音節主音的鼻音で、後続する子音と同調音点で現われる。

マテンゴ語の動詞と動詞文は以下のように構成される。なお NC は名詞クラス接頭辞、後ろの（　）の数字はクラス名を表わす。形態素の境界はハイフン（－）で示す。以下同様。

lu-dʒusi　lu - a - mu - lum - iti　N-budʒamundu
「蜂 sg(11)」　S(11) - 時 - O(1) - 「かむ」- 語尾　「老女 sg(1)(NC(1) - 名詞語幹)」
主語　動詞　目的語

ludʒusi luamulumiti Nbudʒamundu「蜂が老女を刺した」

名詞クラスはマテンゴ語の文法呼応の基盤となるものである。主語辞（S）は、主語名詞が属している名詞クラスに呼応して動詞の語頭に付けられる接辞である。上の文では主語名詞が11クラスに属する ludʒusi なので、11クラスに呼応する主語辞 lu-が付加されている。目的語辞（O）は、目的語名詞が属している名詞クラスに呼応して動詞語幹の直前に付けられる接辞である。上の文では目的語名詞が１クラスに属する Nbudʒamundu であるから、１クラスに呼応する目的語辞 mu-が付く。ただし目的語名詞が人物以外のものを表わしている場合は、動詞に目的語辞を付けないのが一般的である。文の必須構成要素は動詞のみで、主語名詞や目的語名詞が省略されている場合は、主語辞と目的語辞は代名詞として機能する。

tu - á - mu - butukil - a　「我々は彼を追いかける（未来）」
S(2pl) - 時 - O(1) - 「追いかける」 - 語尾

２．母音挿入の現われ方

挿入される母音は、境界の直後の音節の母音と同じ母音である。例文ではイタリック体で示す。

C1V1－C2V2 → C1V1－V2－C2V2

1）mu- kibega → mu - *i* - kibega → mwikibega　「土鍋の中」
mu- (NC(18))、ki-bega「土鍋 sg(7)（NC(7)－名詞語幹)」

2）ki- matɛŋgɔ → si - *a* - matɛŋgɔ → samatɛŋgɔ　「マテンゴ語」
ki/si- (NC(7))、matɛŋgɔ「マテンゴ（民族名)」

3）na- luhombi → na - *u* - luhombi → nuluhombi　「土で（を使って）」
na-（「随伴」前置詞)、lu-hombi「土(11)（NC(11)－名詞語幹)」

例３だけを見れば、na-の母音 a が後ろの母音と同化しているとも考えられる。しかしながら例１を見ると、mu-の母音 u は、単に後ろの母音と同化しているのではなく、半母

音化して残っている。また例2では接頭辞がki-ではなくsi-で現われているが、si-で現われるのは母音の直前に接辞される場合の形態である（表1参照)。従ってkiの直後には母音があるはずである。1や2のような例から、例3についてもこれらと同じ現象、つまり接辞のうしろに母音が挿入されていると考えられる。

3．母音挿入が起こる環境

母音挿入が起こるのは、名詞の直前と目的語辞の直前である。ただしこれらの位置に常に母音が挿入される訳ではなく、限られた場合だけである。以下、母音挿入が起こる環境を詳しく見ていく。

3.1　名詞の直前

3.1.1　場所クラス接頭辞＋名詞

「場所クラス接頭辞」とは、「場所クラス」と呼ばれる16、17、18クラスのクラス接頭辞のことである。場所クラスは他の名詞クラスとは性質が異なり、16、17、18クラスに元々属しているという名詞は存在しない。つまり場所クラスとは、クラス接頭辞だけが存在している名詞クラスである。これら場所クラス接頭辞が他のクラスに属している名詞に付くことによって、それらの名詞は新たに場所クラスに属することになるのである。同時に、付いたクラス接頭辞によって名詞には以下のような意味がそれぞれ付加される。

16クラス	pa-	「～の場所」、「～の時に」
17クラス	ku-	「～の付近」、「～へ」
18クラス	mu- / N-	「～の中」、　「～から」

場所クラス接頭辞は名詞の前に付加されるが、その際に場所クラス接頭辞と名詞の間に母音挿入が起こる。

4）mu- magolu　→　mu - *a* - magolu　→　mwamagolu　「足から」
NC(18)-「足 pl(6)（NC(6)－名詞語幹)」

5）ku- kibega　→　ku - *i* - kibega　→　kwikibega　「土鍋付近」
NC(17)-「土鍋 sg(7)（NC(7)－名詞語幹)」

6）pa- luhusa　→　pa - *u* - luhusa　→　puluhusa　「軒下で」
NC(16)-「軒下 sg(11)（NC(11)－名詞語幹)」

例4～6は、いずれも場所クラス接頭辞と名詞の間に母音挿入が起こっている。しかしながら、以下に示すように場所クラス接頭辞と名詞の間でも母音挿入が起こらない場合も

ある。

7）mu- sindanu → musindanu 「針の穴の中」
NC(18)-「針 sg(9)（NCφ－名詞語幹）」

8）ku- sɛmusɛmu → kusɛmusɛmu 「泉の付近」
NC(17)-「泉 sg(9)（NCφ－名詞語幹」

9）pa- sɛmusɛmu → pasɛmusɛmu 「泉で」
NC(16)-「泉 sg(9)（NCφ－名詞語幹」

10）ku- tandzania → kutandzania 「タンザニアへ」
NC(17)-「タンザニア」

例7～9は、9クラスの名詞に場所クラス接頭辞が付いた例であるが、これらはどれも名詞クラス接頭辞がφである。また例10は固有名詞に場所クラス接頭辞が付いているが、固有名詞には元々名詞クラス接頭辞が付いていない。つまり、名詞クラス接頭辞が付かない名詞に場所クラスの接頭辞が付加される場合には母音挿入は起こらないと言える。

ところが例11～13のように、場所クラス接頭辞の後ろにある名詞に名詞クラス接頭辞が付いているにも拘わらず母音挿入が起こらない場合がある。

11）pa- mihu → pamihu 「顔（目のある場所）」
NC(16)-「目 pl(6)(NC(6)－名詞語幹) mihu<ma-ihu」

12）mu- lihu → mulihu 「目の中」
NC(18)-「目 sg(5)(NC(5)－名詞語幹) lihu<li-ihu」

13）ku- bandu → kubandu 「人々がいるあたり」
NC(17)-「人 pl(2)(NC(2)－名詞語幹)」

これらの例には、後ろの名詞が2音節であるという共通点がある。つまり名詞クラス接頭辞を除いた部分の音節が1音節ということである。例11、12の名詞語幹は2音節だが、クラス接頭辞の母音と語幹頭の母音が融合しているため、結果的に1音節語幹の名詞と同じ音節数になっている。表1に挙げた名詞クラス接頭辞の現われ方をみても、名詞語幹が1音節の場合には、それ以外の場合とは異なる振る舞いをしていることがわかる。従って、母音挿入に関しても1音節語幹の名詞（つまり2音節名詞）が他の名詞の場合とは異なる振る舞いをすると考えることは妥当であろう。

3.1.2 名詞クラス接頭辞＋地名、民族名

地名や民族名などの固有名詞には、場所クラス接頭辞以外に、1クラス、7クラスの名詞クラス接頭辞を付けることができる。それぞれ以下のような意味が加えられる。

1クラス	mu- /N-	「～の人」、「～人」
7クラス	si- /ki-	「～語」、「～的」

14) N- afulika → mwafulika 「アフリカ人」
15) N- gelumani → Ngelumani 「ドイツ人」
16) N- dʒapani → Ndʒapani 「日本人」
17) ki- ɲandʒa → kiɲandʒa 「ニャンジャ語」
18) ki- gelumani → kigelumani 「ドイツ語」
19) ki- dʒapani → kidzapani 「日本語」

例14～19が示すとおり、固有名詞の前に名詞クラス接頭辞が付加されても、その境界に母音挿入は通常起こらない。ところが次の例のように母音挿入が起こる場合もある。

20) N- malawi → mu- *a* - malawi → mwamalawi 「マラウィ人」
NC(1)-「マラウィ(国名)」

21) N- matɛŋgɔ → mu- *a* - matɛŋgɔ → mwamatɛŋgɔ 「マテンゴ人」
NC (1)-「マテンゴ(民族名)」

22) N- masai → mu- *a* - masai → mwamasai 「マサイ人」
NC(1)-「マサイ(民族名)」

23) ki- masai → si- *a* - masai → samasai 「マサイ語」
NC(7)-「マサイ(民族名)」

例20～23はすべて ma で始まる固有名詞であるが、例が示しているとおり ma で始まる固有名詞の前に名詞クラス接頭辞が付くと母音挿入が起こり、いずれも a が挿入されている。これまでの例を見る限り、9、10クラスの名詞や固有名詞のように語頭に名詞クラス接頭辞が付いていない名詞の場合には、その前に別のクラス接頭辞が付いても母音挿入は起こらなかった。それでは ma で始まる固有名詞の場合にはなぜ母音挿入が起こっているのだろうか。

これはマテンゴ語に ma- という名詞クラス接頭辞（6クラス）が存在していることが影響していると思われる。語頭音節が ma の地名・民族名では、その部分が名詞クラス接

頭辞とみなされ[7]、「他の名詞クラス接頭辞の前にさらに別の名詞クラス接頭辞が付加される場合」と同じ現象が起こっていると考えられる。この場合も、固有名詞が2音節であれば、母音挿入は起こらない。

24) ki- manda → kimanda 「マンダ語」
NC(7)-「マンダ（民族名）」

3.1.3 接続詞／前置詞 na＋名詞

na は、句と句あるいは節と節を並列の関係で結ぶ等位接続詞である。また、na は「～を伴なって」という随伴の意味を表わす前置詞としても機能する。いずれの機能で用いられる場合にも、na と名詞の間に母音挿入が起こる。na の母音 a は挿入された母音に融合されるため、結果的に na の母音は後続する名詞の名詞クラス接頭辞の母音と同じ母音で現われることになる。

25) na- luhombi → na - *u* - luhombi → nuluhombi 「土で」
随伴-「土(11)」

26) na- limbɛlɛlɛ → na - *i* - limbɛlɛlɛ → nilimbɛlɛlɛ 「羊といっしょに」
随伴-「羊 sg(5)」

27) mbatata na- lihimbi → mbatata na - *i* - lihimbi → mbatata nilihimbi
「薩摩芋 sg(9)」並列-「ヤム芋 sg(5)」 「薩摩芋とヤム芋」

母音挿入が起こるのは、na の後ろに名詞が続いている場合だけで、後ろに動詞が続いている場合には母音挿入は起こらない。

28) tutɛlɛka na dʒugolola → tutɛlɛka na dʒugolola
「1 pl が料理する」 並列 「3 sg が食器を洗う」 「我々が料理し彼が食器を洗う」

また3.1.1、3.1.2の場合と同じく、母音挿入が起こるのは na の後ろに続く名詞が、名詞クラス接頭辞の付く3音節以上の名詞の場合に限られる。例29のように2音節の名詞や例30のように名詞クラス接頭辞が付いていない名詞が後ろに続く場合には母音挿入は起こらない。

29) likutu na -lihu → likutu nalihu 「耳と目」
「耳 sg(5)」 並列-「目 sg(5)」

30) misimali na - tibili → misimali natibili 「金釘と木釘」
「金釘 pl(4)」 並列 -「木釘 sg/pl(9/10)」

3.1.4 属辞＋名詞

「～の…」という表現に用いられる属辞は、属辞の前に位置する名詞に文法呼応し（表1参照)、後ろ側の名詞の語頭に付加される。語順は次のとおりである。

lihina lja - hɔmba 「魚の名前」
「名前 sg(5)」 属辞(5) 「魚 sg/pl(9/10)」

後ろに位置している名詞と属辞が結合する際に、属辞の後ろには、挿入母音として、後続する名詞の名詞クラス接頭辞の母音が挿入される。属辞の母音 a は挿入された母音に融合されるため、結果的に属辞の母音は後続名詞の名詞クラス接頭辞の母音と同じ母音で現われることになる。

23) mambandi ga- mikɔŋgu → mambandi ga - *i* - mikɔŋgu
「枝 pl(6)」 属(6) 「木 pl(4)」 → mambandi gimikɔŋgu 「木の枝」

24) sindu sa- kutɛlɛka → sindu sa - *u* - kutɛlɛka
「物 sg(7)」 属(7) 「料理すること(15)」 → sindu sukutɛlɛka 「料理の道具」

25) kugolu kwa- kitɛu → kugolu kwa - *i* - kitɛu
「足 sg(15)」 属(15) 「椅子 sg(7)」 → kúgolu kwikitɛu 「椅子の脚」

属辞の後ろに続く名詞が2音節以下の場合、あるいは名詞クラス接頭辞を取らないものの場合には、母音挿入は起こらない。

26) kilɔnda sa - linu → kilɔnda salinu 「歯の跡」
「傷痕 sg(7)」 属(7)- 「歯 sg(5)」

27) mandilisa ga - ɲumba → mandilisa gaɲumba 「家の窓」
「窓 pl(6)」 属(6)- 「家 sg(9)」

28) mwɔtɔ gwa - kɔlɔbɔhi → mwɔtɔ gwakɔlɔbɔhi 「ランプの火」
「火(3)」 属(3)- 「ランプ sg(9)」

3.2　目的語辞の前

動詞の中に母音が挿入されるのは、常に目的語辞の直前である。主語辞と目的語辞の間には時辞が位置するが、現在を表わす時辞はφであり、その場合には主語辞の直後に目的語辞が位置することになる。その結合の際に母音挿入が起こる。

3.2.1　母音 u を持つ主語辞＋目的語辞

母音 u をもつ主語辞の直後に目的語辞が続く場合、これらの間に目的語辞の母音が挿入されることがある。これは自由変異である。挿入母音が入ると S 辞の母音 u が半母音化するので、結果的に CwV で現われる（C は子音を表わす）。

29）dʒu　-dʒi　- bɔpɔl - iti　→　dʒi - *i* - dʒi- bɔpɔl- iti
S(3sg)-O(9)-「放つ」- 語尾[8]　→　dʒwidʒibɔpwili　「彼はそれ(9)を放った」

cf）目的語辞がない場合
29'）dʒu　- bɔpɔl-iti　→　dʒubɔpwili　「彼は放った」
S(3sg)-「放つ」- 語尾

30）gu　-ga　- bag　-iti　→　gu - *a* - ga - bag - iti
S(2sg)-O(6)-「配る」- 語尾　→　gwagabagiti　「君はそれ(6)を配った」

3.2.2　1人称単数の主語辞 n- ＋目的語辞

1人称単数の主語に呼応する主語辞 n- は単独では音節を形成することができないため、後続する音節に組み込まれてしまう。ところがこの主語辞の直後に目的語辞が続く場合には、その目的語辞と同じ母音が挿入され、挿入された母音とともに新たな1音節をつくる。

31）n　-gu　- bɔn　-iti　→　n - *u* - gu - bɔn - iti
S(1sg)-O(2sg)-「見る」- 語尾　→　nugubɔniti
「私は君を見かけた」

32）n　-ki　- boːl　-a　samatɛŋgɔ　→　n - *i* - ki - boːl - a samatɛŋgɔ
S(1sg)-O(7)-「教える」- 語尾　「マテンゴ語(7)」　→　nikiboːla samatɛŋgɔ
「私はマテンゴ語を教える」

33）n　-ka　- keŋgek - a kamwana　→　n - *a* - ka - keŋgek - *a* - kamwana
S(1sg)-O(12)-「抱く」　- 語尾　「赤ちゃん sg(12)」　→　nakakeŋgeka kamwana
「私は赤ちゃんを抱く」

4．母音挿入と母音交替

3章で見てきたように、母音aの直後に母音Vが挿入された場合にはaがVに融合されてしまうため、現われ方はaをVに置き換えた場合と同じになる。つまり、母音aが母音Vで現われる現象に対しては2とおりの解釈が可能である。

A：aはVに置きかえられた（母音交替）
B：aの直後にVが挿入された後、a＋V→Vという融合が起こった（母音挿入）

この章では、時辞の母音が直後にある目的語辞の母音と同じ母音で現われる現象について、上記のいずれの解釈が適当であるかを検討する。さらに3章で「母音挿入」として捉えてきた各現象についても検討する。

マテンゴ語の時辞[9]には以下のようなものがある。

- ϕ -	：	現在	- aká -	：	移動
- a -	：	過去	- ikí -	：	禁止
- í -	：	未来	- aka -	：	同時
- i -	：	否定	- áka -	：	仮想

これらの時辞のうち母音aを含むものは、後ろに目的語辞が続くと、時辞の母音aが目的語辞と同じ母音Vで現われる。

①時辞 - a -
過去形の時辞 - a - の場合について、AとB両方の解釈をしてみる。

A：母音交替の解釈

34A）tu　-a -ki　- bomb -iti　→　tu - i - ki - bomb - iti
S(1pl)-時-O(7)-「作る」-語尾　→　twikibombiti
「我々はそれ(7)を作った」

35A）tu　-a -lu　- bomb -iti　→　tu - u - lu - bomb - iti
S(1pl)-時-O(11)-「作る」-語尾　→　tulubombiti
「我々はそれ(11)を作った」

B：母音挿入の解釈

34B）tu - a - ki - bomb - iti → tu - a - *i* - ki - bomb - iti
→ tu - i - ki - bomb - iti
→ twikibombiti

35B）tu - a - lu - bomb - iti → tu - a - *u* - lu - bomb - iti
→ tu - u - lu - bomb - iti
→ tulubombiti

時辞 -a- の場合には、いずれの解釈でも特に問題は見られない。そうなると pa-、na、属辞と同じく、時辞 -a- の場合の現象も母音挿入であると考えたほうが、「同じ現われ方は同じ現象が起きた結果である」という、より合理的な解釈であるということになるだろう。ところが次に述べるような場合には母音挿入の解釈が難しくなってくる。

②時辞 -aka-

移動形と呼ばれる時辞 -aká-（LH）、同時形 -aka-（LL）、仮想形 -áka-（HL）は、目的語辞に後続される場合、a がふたつとも目的語辞の母音と同じ母音で現われる。

36）tu -aká - ki - bomb - adʒɛ → tu - ikí - ki - bomb - adʒɛ
S(1pl)-時 -O(7)-「作る」-語尾 → twikíkibombadʒɛ
「我々はそれ(7)を作ってくる」

cf）目的語辞がない場合

36'）tu -aká - bomb - adʒɛ kibega → twakábombadʒɛ kibega
S(1pl)-時 -「作る」-語尾 「土鍋 sg(7)」
「我々は土鍋を作ってくる」

接辞内の母音が2つとも目的語辞の母音と同じ音で現われる現象を母音挿入の結果であるとするためには、母音が2ヶ所に挿入されたと考える必要がある。目的語辞を -ki- とすると、この考えは次のように表わせる。

37）- aka - ki - → - a*i*ka - *i* - ki - → - iki - ki -

例37の考え方では、ひとつめの V は形態素の境界ではなく形態素の内部に挿入されることになってしまうが、これは考え難い。従って、後方の a については時辞 -a- と同じように考えることができたとしても、前方の a が目的語辞と同じ母音で現われることについては「母音挿入＋母音融合」の結果ではあるとは考えられない。さらに次の例を見ると、時辞と目的語辞の間に起こっている現象を母音挿入とは解釈し難くなってくる。

③時辞 -i-

母音 i を含む時辞の未来形 -í- (H)と否定形 -i- (L)は、後ろに目的語辞が続く場合、目的語辞の母音に関係なく -á- 、-a- で現われる。

38) tu -í -ki - bomb - adʒɛ → tu - á - ki - bomb - adʒɛ
S(1 pl) - 時 - O(7)-「作る」 - 語尾 → twakibombadʒɛ
「我々はそれ(7)を作るつもりだ」

cf. 目的語辞がない場合

38') tu -í - bomb - adʒɛ kibega → twíbombadʒɛ kibega
S(1 pl) - 時 - 「作る」 - 語尾 「土鍋 sg(7)」 「我々は土鍋を作るつもりだ」

39) gu -i - lu - bomb - adʒɛ → gu - a - lu - bomb - adʒɛ
S(2 sg) - 時 - O(11)- 「作る」 - 語尾 → gwalubombadʒɛ
「君はそれ(11)を作ってはいけない」

cf. 目的語辞がない場合

39') gu - i - bomb - adʒɛ luhagi → gwibombadʒɛ luhagi
S(2 sg) - 時 - 「作る」 - 語尾 「皿 sg (11)」 「君は皿を作ってはいけない」

目的語辞の母音に関係なく常に時辞の母音が a で現われるのであるから、これは目的語辞の母音が挿入されている訳ではない。たとえ「挿入される母音が常に a である」というこれまでとは少し異なった母音挿入を考えたとしても、その場合には時辞 -i- は半母音として残るはずである。従ってこの時辞の現われ方は母音挿入によるものであるとは考えられない。時辞 -i- の場合が母音挿入でなく母音交替であるなら、同じ時辞である -a- や -aka- の場合も母音交替であると考えるべきであろう。

もうひとつ注意すべき点は、時辞の現われ方は文法機能を持っている、ということである。バンツー諸語の中には、「過去形は末尾母音を動詞語幹の母音と同じ母音に置きかえる」といった活用をする言語も少なくない。マテンゴ語の場合も、母音が目的語辞と同じ母音で現われていれば過去時辞、目的語辞があるのに母音が a で現われていれば未来時辞、というように、母音によってテンス・アスペクト・ムードが表わされているのである。従って、時辞の母音が目的語辞の母音と同じ母音で現われるという現象は「文法的にも意味的にも影響を及ぼさない」という挿入母音の枠から外れている。

ここで、3.2.2に挙げた1人称単数の主語辞の後ろに目的語辞が続いた場合について、もう一度考えてみたい。この場合は、明らかに目的語辞の母音が挿入されている。しかしながら、挿入された母音は主語辞とともにひとつの音節を作ることで、その間に時辞がないこと、つまりその動詞の時辞が ϕ であることを示しているのである。名詞の前に起こった母音挿入とは違って、これは明確な文法機能を持つ母音である。従って、3.2.2に挙げた時辞と目的語辞が結合する際に起こっている現象は、本稿で言うところの「母音挿入」

とは分けて考えるべきである。一方3.2.1で挙げた現象はどうだろうか。これも確かに母音が挿入された形跡が残っている。ただし母音の挿入は自由変異であり、挿入してもしなくても文法的な影響は全くない。また同種の形態素の中に異なる振る舞いをするものがないことからも、母音挿入として捉えてもよいだろう。少なくとも母音交替や3.2.2の現象とは全く別のものである。

随伴のna、属辞の場合はどうだろうか。いずれも母音がaであるから、これらの母音が後続する名詞クラス接頭辞の母音と同じ母音で現われるという現象は、単独で考えれば「naや属辞の母音は後続する名詞クラス接頭辞の母音に置き換えられる」という母音交替の可能性も十分考えられる。しかしながら、名詞クラス接頭辞が付き、かつ2音節以上の語幹を持つ名詞でなければ母音に変化が起きないという条件は、場所クラス接頭辞と名詞クラス接頭辞の間に起こる母音挿入の条件と全く同じである。従って、これらを同じ現象として扱うのが適当であると思われる。

5．まとめ

以上見てきたように、母音挿入が起こる環境は、①場所クラス接頭辞、na、属辞が、「名詞クラス接頭辞－2音節以上の名詞語幹」という構成の名詞の前に接辞される場合、②場所クラス接頭辞および1、7クラスの名詞クラス接頭辞が、maで始まる3音節以上の固有名詞の前に接辞される場合、である。maで始まる3音節以上の固有名詞とは、maの部分を6クラスの名詞クラス接頭辞と捉えれば「名詞クラス接頭辞－2音節以上の名詞語幹」と同じである。つまりこれは「名詞クラス接頭辞－2音節以上の名詞語幹」に準ずるものと言えるだろう。そこでこれらのことをまとめると、母音挿入が起こる環境と条件は以下のようになる。

40) 名詞クラス接頭辞およびそれに準ずるものの前に別の接辞が付加される場合、その境界に母音が挿入される。挿入されるのは、境界の直後に位置する音節、つまり名詞クラス接頭辞の母音である。ただし名詞クラス接頭辞の後ろにある名詞語幹が2音節以上の場合に限られる。

3.2.1で見た、母音がuの主語辞の後ろに母音が挿入される現象は、40の条件にはあてはまっていない。この現象が自由変異であることから、これは元来からの現象ではなく、名詞クラス接頭辞の母音挿入やその他の音韻規則が過剰適用されているという可能性もある。しかしながらこの現象が目的語辞の前でしか起こっていないことを考えると、形態的条件のもとで母音挿入が起こっている名詞クラス接頭辞の場合と同様の振る舞いであると思われる。そこで次のまとめを母音挿入が起こる環境と条件として40に加えることにする。

41) 母音にuをもつ主語辞の直後に目的語辞が接辞される場合、その境界に母音が挿

入される。挿入されるのは、境界の直後に位置する音節、つまり目的語辞の母音である。ただしこの母音挿入は自由変異である。

母音挿入が起こる環境を見ていくと、それが単に音声的条件のみによるものではないことがわかる。音声的なものであれば、それが接辞であろうと語幹であろうと関係なく同じ現象が起こるはずであるが、母音挿入の場合には音声的条件に加えて形態的条件が大きく関わってくる。このように音韻論領域と形態論領域が明確に分けられないのがマテンゴ語をはじめとするバンツー諸語の特徴のひとつでもある。本稿の中でも示したとおり、形態素が結合される際にいろいろな音韻現象が重なって起こるため、別な現象であっても結果的に同じ表層形になってしまうことも少なくない。マテンゴ語では、本稿で扱ったもの以外にも、形態素結合の際に適用される母音交替や母音調和、さらにそれらのキャンセルなど、数多くの規則が見られる。今後はそれらも合わせて、マテンゴ語の母音に関する規則の全体像を明らかにしていきたいと考えている。

注

1．マテンゴ人の人口は約15万人と言われているが、スワヒリ語の浸透によって多くの若者が自分の民族語を話せなくなっているというタンザニアの言語状況を考えると（Yoneda 1996)、マテンゴ語の話者数は10万人を大きく下回るものと推測される。
2．調査は文部省科学研究補助金（国際学術研究)「東アフリカにおける地域共通語に基づく文化圏生成とエスニシティの構造」(研究代表者：大阪外国語大学宮本正興教授）により、1996年９月～1997年３月、1997年７月～12月にタンザニア、ンビンガ県で行なった。なお、タンザニアにおける調査はTanzania Commission for Science and Technologyの許可によって可能となった。インフォーマントは、1932年ンビンガ県生まれのC.S. Ndunguru Kamchatika氏である。マテンゴ語の他にはスワヒリ語と英語を話す。氏の両親、妻ともマテンゴ人である。
3．マテンゴ語は正書法が定まっていない。本稿で用いる表記は、音韻表記を基本としているが、混乱を招きそうなところについては簡略化している部分もある。またこの言語は声調言語であるが、時辞の声調以外は本稿の内容と直接関係しないので表記は省いた。
4．（　）内の数字は、その名詞が属する名詞クラスを表わす。名詞クラスについては**1.2.2**を参照のこと。
5．母音iで終わる接辞が限られているため、半母音化しない例はこれらの他に確認できないが、Cjという連続を作らない子音には、他にもt、g、n、ŋがある。
6．バンツー諸語の名詞クラスには、比較研究のためにバンツー祖語を基にして一定のクラス番号がつけられている(Guthrie 1967 b：92、Meeussen 1967：97他)。本稿でもそのクラス番号に従って各名詞クラスに番号を付す。かつては各クラスに意味的な共通点があったとも考えられるが、少なくとも現在ではその特定は困難である。
7．なぜmaだけが名詞クラス接頭辞とみなされるのか、という問題が残るが、それは「マテンゴ」という民族名の成り立ちに関係すると思われる。「マテンゴ」という民族名は、マテンゴ語の“kitɛŋgu”「森」に由来する（Ebner 1987：43)。kitɛŋguの名詞語幹tɛŋguに集合を表わす名詞クラス接頭辞ma-が付き、「森に住む人々」を意味するmatɛŋgɔという名前ができあがったと考えられている。そうなると、matɛŋgɔの語頭音節maはもともと名詞クラス接頭辞だったということになる。
8．語尾の子音が交替しているが、これはバンツー諸語に広く見られるimbrication（Bastin 1983：88）と呼ばれる語尾変化規則が適用されているためである。この規則は本稿の内容には関係し

ていないので、説明は省略する。

9．時辞は、語尾との組み合わせによって動詞のテンス・アスペクト・ムードを表わす。従って「時辞」という名称は便宜的なもので、時制の範疇をかなり越えている。

参考文献

Bastin, Y. *La Finale Verbale-Ide et L'imbrication en Bantou.* Musee Royal de L'afrique Centrale: Tervuren, 1983.

Ebner, Elzear P. *The History of the Wangoni.* Benedictine Publications: Peramiho, 1987.

Guthrie, M. *Comparative Bantu.* I～IV, Gregg International: Farnborough, 1967－1971.

Meeussen, A. E. "Bantu Grammatical Reconstruction." *African Linguistica,* 3, 1967.

Yoneda Nobuko. "The Impact of the Diffusion of Kiswahili on ethnic Languages in Tanzania : A Case Study of Samatengo." *African Urban Studies* IV, Institute for Study of Languages and cultures of Asia and Africa:Tokyo, 1996: 29－73.

米田信子『マテンゴ語の記述研究（バンツー系、タンザニア）―動詞構造を中心に―』東京外国語大学に提出した博士論文、2000.